95 KOBE
7つの愛の物語

■1／余震の中で第一号

りりしい救援 絆を固める

佐本 淳・真智子さん

聖ミカエル教会で第1号の結婚式を挙げた佐本淳・真智子さん

余震がまだ激しい二月十一日、聖ミカエル教会で震災後、神戸で第一号のカップルが誕生した。佐本淳さんと真智子さんは小学校からの幼馴染み。お互いの両親同士の仲が良く、六年前に真智子さんの家族が福岡へ引っ越してからもずっと続いていた。淳さんと真智子さんが再会したのは三年前。「久しぶりに会おうか」と淳さんが福岡を訪ねたのがきっかけで、神戸⇔福岡間の遠距離恋愛が始まった。

あの大震災の日、真智子さんは結婚準備のために神戸へ。北野町の淳さんの実家で震災にあった。「真っ先に助けに来てくれてうれしかった」と真智子さん。その後の真智子さんを気遣って実家へ送りとどけたり、近所の壊れた真っ暗な家の中へ入って救助したり、水を汲んできたり、食糧を運んだりする淳さんがとても頼もしかったとか。淳さんは「一緒に震災を経験したことで二人が同じ気持ちになれて、同じスタートができたことはよかった」と語る。震災によって、二人の愛はさらに深まったようだ。

淳さんの両親の結婚記念日でもある二月十一日は二人にとっても大切な日となった。「こんな時に結婚式は無理だろうと思っていましたが、聖ミカエル教会の牧師さんや家族、親戚、友人、周りのたくさんの人々に助けられて予定どおり結婚式を挙げることが出来ました。本当に感謝しています」。

ウエディングケーキは淳さんの母親の友人の手作り。引出物も友達の手作りと、手作り結婚式となった。交通手段がなく、結婚式に出られなかった親戚の方もあったが、出席出来た親戚や友人たち約六十人とボランティアの人々にも祝福された。「僕らよりも、この結婚式のために一生懸命に準備をし、助けてくださった方々に喜んでいただいたのが一番うれしかった」と淳さん。

恐怖と寒さに震える被災者たちの心を温めてくれた主人公の二人は、とても幸せそうに笑った。

95 KOBE
7つの愛の物語

■2／ホテルオープン第一号

すべてが新しい舞台で

浅倉裕人・美穂子さん

神戸メリケンパークオリエンタルホテル・チャペル前の浅倉裕人・美穂子さん

七月十五日、神戸メリケンパークオリエンタルホテルがオープンした。オープン当日に同ホテル教会で第一号の結婚式を挙げるという幸運を手にしたのは、浅倉裕人・美穂子ご夫妻。ヒマワリのように明るい奥様と少しシャイなご主人様はとても仲がよく、ほほえましいカップルだ。

震災後、倒壊したビルの解体が進み、街は剝き出しになったコンクリートの塊が生々しい。そんな中で新しいホテルのオープンは明るい話題だった。オープニングセレモニーには、教会と神前で挙式の第一号カップル二組によるテープカットが行われ、多くの報道陣が駆けつけた。

「教会も披露宴会場もなにもかもが新しくて感動しました。ホテルの担当の方もとっても親切でよかったです」と美穂子さん。「テープカットは報道のかたがたもたくさんおられて結婚式より恥ずかしかった」と裕人さん。

二人は同じ会社で知り合い、テニスやスキーの仲間だった。半年後、美穂子さんが転勤、職場が離れたが、その後を追うように裕人さんも転勤、再び同じ職場となった。二年後、ごくごく自然に婚約した。式場を決めようというとき、友人の結婚式の二次会の席でメリケンパークオリエンタルホテルオープンの話を聞き、即電話で申し込んだ。

地震が起きたすぐ後に裕人さんから美穂子さんに安否確認の電話があった。その電話で美穂子さんは「やっぱりこの人だ」と愛を確認した。

裕人さんは会社に泊まり込んで復旧作業に入った。ようやく一カ月経ってホテルを見に行った。道は割れ岸壁は落ちていた。できないのでは？ と思っていたときにホテルから連絡があった。「大丈夫です」

コロコロと笑う美穂子さんと優しく見守る裕人さん。幸せが向こうからたずねて来そうな明るさの中で新しい人生が始まった。

95 KOBE
7つの愛の物語

■3／ふたりの画家

ぼくが代りになれないか？

藤田一路・実由記さん

画家仲間たちの手づくりのケーキにナイフを入れる藤田一路さん・実由記さん

藤田一路さんと、赤川実由記さんは、同じ美術団体「現代童画会」に所属している。お互いを意識していたが、告白しないまま八年間の歳月が過ぎていた。藤田さんは、マンションの管理人をしながら、絵を描いている。

そんな中、お父さんのすすめで浅川さんが婚約したのは、二月のことだった。相手は藤田さんではなく別のサラリーマン。「震災を機に、安定した生活を」というのが、お父さんの願いらしいが、藤田さんからすれば、砂をかむような、苦い事件だった。

それから数日後、赤川さんの自宅を訪れた藤田さんは、彼女とお父さんの前で「その人の代わりに、僕がなれないですか？」と。何げないセリフだったが、不器用な藤田さんにすれば、「断られるかもしれない」という不安の中、精一杯の言葉であった。赤川さんも〝この言葉〟を心待ちにしていた。

最初、お父さんは反対したが、娘の〝本心〟には勝てなかった。結局これが会心の一手となり、八年間の空白を一瞬にして埋めてしまった。今、二人は六畳一間のマンションで生活している。

あの時の藤田さんの様子を赤川さんはこう見ていた。「半壊したマンションに管理人として残り、住人ひとりひとりの安否を確認して回ったり、早く水道・ガスを復旧させようとしながら、好きな絵を描き続ける姿を見て、こういうことを、平気でできる人と一緒になろうと決心した」

五月二十日、六甲スカイビラで行われた結婚式には、現代童画会のメンバーをはじめたくさんの人が駆けつけた。「お金のない二人だから」と、出席者がいろいろ趣向をこらした式となった。ウエディングドレスはメンバーの妹が二十年前に着たもの、ウエディングケーキもメンバーが作ったもの、祝い歌も手作り…そして、出席者は、心から二人を祝福した。

最近、藤田さんの絵が変わってきたと赤川さんは言う。「以前はモノの表面的な美しさを求めていたが、内面的な絵を描くようになった」と。今の幸せな生活の中から、〝人の温もり〟を感じているのだろうか。

95 KOBE
7つの愛の物語

■4／すれ違いを乗り越え

地震なんかに裂かれない

安水和彦・真紀さん

長田の安水和彦さんは降りかかってきた本の下敷きになった。東灘の渡辺真紀さんは、気分によって布団を敷く位置を変える癖がある。昨夜も変えた。倒れかかったタンスは頭からそれた。手には少し傷。家は壊れた。

キャンドルサービスの安水和彦・真紀さん

和彦さんは公衆電話に走って行った。真紀さんは和彦さんの自宅に電話した。二人は声を交わすことはできなかったが、互いに無事であることが分かった。

和彦さんは、自転車に食料をしばりつけ、御影へ走った。壊れた家は無人だった。避難所を聞き出し、小学校へ向かった。真紀さんは、家の屋根にかけるシートを探しに出かけていた。すれ違い、すれ違い。

「予定通り結婚式を挙げるのはムリか」―ちらっとあたまをかすめた。「地震なんかに負けるのはいやや」と思い返した。双方の両親は「予定通り式を挙げなさい。それがいまの神戸を生き抜く目標にもなる」と二人を励ました。

和彦さんが勤める銀行は、勤務先を大阪の支店から神戸の支店へ替えてくれた。行員の通勤をスムーズにする配慮だった。二人の新居探しは、はじめの阪神間から方向転換し、明石、加古川方面に変わった。新聞広告や情報誌に目を通し、電話した。倒壊家屋十九万二千七百六、倒壊世帯四十万六千三百三十七の大震災の後、新居を探そうとするのだ。ムリは承知だった。

土日、不動産屋を手当たりしだい訪ねた。空いているマンションがあっても、翌日行くともうだれかに決まっていた。検討するヒマはなかった。あきらめかけたころ、ひとつ見つかった。中を見ることもできなかったし、家賃も予定していた額よりはるかに高かった。生活費をどのくらい切り詰められるか。二人は決心した。

六月十日、予定通り、ポートピアホテルの教会で挙式した。和彦さんの父、詩人の稔和さんは、自作の詩の一節を引用してあいさつした。「愛は水である。器にしたがい、そのかたちをとる」

二人はどれだけ大きなこころの器を作りあげていくだろうか。

95 KOBE
7つの愛の物語

■5／ボランティアの出会い

廃墟のたき火の輪から

戸田尚行・昌代さん

ボランティア仲間に祝福される戸田尚行・昌代さん

尚行さんは、舞鶴に住む精密器械の技術者だったが、悲惨な神戸の映像をただ見ているわけにはいかなかった。一月二十九日、鷹取教会のボランティアグループに加わった。力仕事は初めてだったが、鳶職の服装とハンマー、ノコギリで身を固め、壊れた屋根に上がって、ブルーシートを張ったり、仮設住宅への引っ越しを手伝っていた。

作業が終わると、ボランティアたちはたき火を囲んでギターを弾き、ハーモニカを吹き、歌を歌った。尚行さんはオカリナを吹いた。歌っている一人に辻川昌代さんがいた。

昌代さんの実家は加古川。カトリック加古川教会に通っていた縁で鷹取教会に支援に来ていた。たき火を囲む日々が続いた後の三月末、尚行さんは昌代さんにプロポーズした。昌代さんは一週間考えて返事した。

二人が、神父さんに「実は」と話すと、教会は「結婚講座」のプログラムを組み、二人でいる時間を持ちなさいと勧めた。初めてのデートは、元町の高架下商店街。二人で作業用の服を探した。

式は、八月十七日。テントの下で神田裕神父が司祭し、ボランティアリーダーの和田耕一夫妻が証人になった。神田神父は「鷹取教会は世界各地から差し延べられた救援の基地です。この出会いは、世界に広がるふれあいです」と祝福した。

二人は「この神戸が新しく生まれ変わるとともに、私たちも二人で新しい人生を歩むことを約束しました。たき火を囲み、寒さに震えながら過ごした日々のことを忘れず、生涯互いに助け合って行くことを誓います」と述べた。

尚行さんは、鷹取で覚えた腕を生かして建設会社に就職、いま別の道から復興に努めている。

鷹取には、世界中から四千人以上のボランティアが集まってきた。いまもなお活動の輪が広がり、新しい仲間を必要としている。ここでのふれあいは、またどこかで新しい愛を誕生させているかもしれない。

95 KOBE
7つの愛の物語

■6／反対された愛実る

真の誠意に打たれた親心

斉藤真吾さん・裕子（ひろこ）さん

司会を務めたのは新郎の父。小さいながらも心暖まる結婚式だった

「僕、彼女の両親に嫌われてたんです」

友人の紹介を通して二人が知り合ったのは昨年の六月終り。若い二人にとって、流れる時間はあまりにも早く、ついつい彼女は家の門限を破ってしまう日が続いた。

何といってもかわいい一人娘。ご両親としては当然「悪い虫がついたのでは」と心配されていたにちがいない。

あの日、真吾さんは仕事で静岡にいた。彼の車のナンバーを見た高速道路の料金所の男性が教えてくれた。「神戸で地震があったみたいだよ」。急いでカーラジオのスイッチを入れる。『死傷者が五名ほど出ているようです』。大きな地震ではないと思った。しかし、引き続き聞いていると、ラジオは神戸の惨状を伝え始めた。『長田が燃えています』。長田の寺池町にある木造建ての彼女の家。パーキングエリアに立ち寄るごとに電話をかけるが連絡がとれない。「心配で気が狂いそうでした」

渋滞の中、やっとのことで神戸に帰ってこられたのは二十一時間後。休む間もなく裕子さん一家が避難する兵庫高校へかけつけた。

裕子さんの実家は全壊。水と食料を手に時間の許す限り避難所へ足を運んだ真吾さん。震えながら泣き崩れる彼女の姿に心が痛んだ。「俺が面倒みたるから心配するな」。

結婚を申し出た彼に、裕子さんの父親はただ一言、静かに告げた「娘をよろしくお願いします」。交際以来、真吾さんにかけられたはじめての言葉だった。誠意が彼女のご両親にも伝わったのだ。

この六月に、ふたりは神戸凰月堂88の教会で小さな式を挙げた。「笑いがたえない毎日です。彼はとても頼りがいのある人。仕事が忙しいので心配です。身体に気をつけてください」

一途でやさしい裕子さんを守り通していきたいと語る真吾さん。「何があってもずっと僕についてきてほしい」

今、裕子さんのおなかの中にはもうひとつの命が息づいている。

95 KOBE
7つの愛の物語

■7／本誌記者、急転直下型結婚

ロシアへ愛の取材旅行（自費）

矢島 潤・紀子さん

お祝いにコウノトリのぬいぐるみをもらう紀子さんと本誌・矢島。豊岡市で

神戸を震撼させた二十秒間。そのとき、本誌・矢島はなぜか自宅でない王子公園のマンションにいた。テレビが頭の上に落ちてきた。そばにいた本来の入居者には、箪笥が倒れ掛かった。矢島がたびたび通って、美しく整頓していた部屋は一瞬にして錯乱した。

一緒にいたひと、神戸新聞記者の加藤紀子さんは、ヒッチハイクをして三宮の新聞会館に向かった。矢島も編集室に向かおうとしたが、辺りの光景に愕然。両親が住む六甲の自宅も危ない。

駆けつけると、木造の自宅はやはり全壊。両親は東京に避難した。数日後、矢島は紀子さんと愛を誓った。断じて家賃を安くあげようと謀ったためではない。善は急げ、ご両親にあいさつだ。代替バスとJR、阪急を乗り継ぎ、紀子さんの実家がある池田に向かう。

「いま街は大変な状況です。月並みですが、ふたりで力を合わせて生きていこうと思っています」

あいさつが済むと、矢島は風呂のもてなしを受けた。十二日ぶりだった。風呂上がりにはビールと水炊き。「幸せだなあ」。ふたりの愛はよりいっそう深まった。

なんとか新居を見つけた。ねぐらを失った鳩もベランダに巣づくりを始め、糞に悩まされながらの愛の生活が始まった。三月一日、罹災証明を求める人々でごった返す灘区役所で入籍を済ませ、記念にきつねうどんを食べた。

「料理はうまいし、買い物上手。洗濯もまめにします」と、矢島は自らを語る。「ただし、洗濯物はたたみません」と、アイロンをかけながら紀子さんは笑う。その横で寝転びながら、矢島は煙草の灰で畳を焦がしていた。

震災以降、矢島の体重は激減、紀子さんも自身の微減を主張する。屈託なく笑う紀子さんと力なく笑う矢島の横顔に幸福感をよみとるひとは少なくない。

式を挙げていないふたりに同情した人たちが、祝いの会を開いてくれた。紀子さんの同期の社員や神戸市広報課の人たちからは気さくな飲み会、前任地・但馬の人たちからは盛大なパーティーに招待された。但馬でもらったコウノトリのぬいぐるみは目尻が隈取りのように赤く、夜ごと矢島の歌舞伎ごっこの相手をさせられている。

九月十日に双方の両親と兄弟らを招いての食事会で、新婦のウェディングドレス姿をついに披露。同夕刻には本誌主催の月見会で、酒の肴にされた。同月十二日にはロシアに旅立ち、エリツィン大統領に結婚祝いとして北方四島を要求するという。

ふたりの未来は明るい。

■神戸復興キャンペーン座談会

12月17日（震災から11カ月目）〝神戸は愛の街〟記念日

ブライダル都市神戸に

〈座談会出席者〉（五十音順・敬称略）

井上　篤〈生田神社権宮司　生田神社会館専務理事〉
大坪　誠〈神戸ハーバーランドニューオータニ　取締役総支配人〉
衣川　秀樹〈三宮写真室代表取締役社長〉
浜田　勉〈神戸風月堂専務取締役〉
丸本　雄三〈田崎真珠商品本部本部長〉
見市　耐治〈新神戸オリエンタルホテル　専務取締役総支配人〉
村上　和子〈ジャーナリスト〉
望月　恭夫〈ホテルオークラ神戸常務取締役〉
渡辺　忠男〈神戸ポートピアホテル　専務取締役総支配人〉
〈司会〉
小泉美喜子〈月刊神戸っ子編集長〉

司会　昨年の二月号で、ブライダル業界の方々のご出席で座談会を行いましたが、その席で神戸のブライダル業界がまとまって神戸らしいサービスを提供していこうという案がでました。その後震災があったわけなんですが、震災が契機で結婚するカップルもいたりして、全体的に人間愛というか、ヒューマンリレーションといった風潮が高まった。そういう街になってきているんじゃないかなと思っております。私も編集長になってから「神戸は愛の街」といいつづけておりまして、ぜひいい意味で「ブライダル都市・神戸」をおしすすめていきたいと思ってお集まり頂きました。

★多様化するブライダル市場

村上　今回の震災という非常事態の中で、誰が本当に自分のことを思ってくれているかわかったということが多くありました。結果別れたカップルも多いそうです(笑)。通常の時の離婚率よりずっと高いそうです。でもまた逆に思いきり大切な人になってしまってゴールインするカップルもたくさんいますね。震災がきっかけになって、結婚した人も多いですが、これから神戸の街が復興していくに従って新しいブライダルビジネスというのを提案していけたらいいんじゃないでしょうか。根本から結婚ビジネスを考え直して「ブライダル都市・神戸」のイメージをつくっていくということが必要でしょうね。

大坪　ハーバーランドは今とても賑わっており、神戸で是非結婚式をしたいというカップルにむけて一早く街全体でサポートできるウェディングを提案しております。まず今度神戸阪急さんと組んで、一階のロビーでキリスト教人前挙式といって牧師さんがいて、大勢の人たちの前で愛を誓うというスタイルで挙式をやります。今結婚

村上　和子さん

渡辺　忠男さん

見市　耐治さん

大坪　誠さん

望月　恭夫さん

井上　篤さん

衣川　秀樹さん

丸本　雄三さん

浜田　勉さん

式も多様化しています。今回のは神戸の街の特色の生かせる部分でやろうという提案です。

司会　まあいろんな意味でかなり神戸は大打撃をうけているんですが、その中で何か夢のあることで人々を誘っていくということだと思うんですが。

望月　今はホテル全体が厳しい状況にあるんですがそれを乗り切って、うれしいことに新しくつくったチャペルでの挙式が増えています。今は若いカップルの方々の方がホテル事情に詳しくてらっしゃる。メリケンパークには新しくオリエンタルホテルができましたんで、いままでより若い人がふえるじゃないでしょうか。

渡辺　やっとポートライナーが通りまして一安心です。今度私どもも高い天井を利用しましたロビーウェディングをうりだします。また、クリスマスウェディングやバレンタインウェディングなど四季の行事をとりいれたものもやっております。やはり新しい事をやっていかなくてはとアイデアをだしあっています。

浜田　私どもはホテルと申しましても商工会議所会館の中にあるという制約があります。とはいえ先代がこりにこってつくっていますので、非常にオリジナリティーがあります。私どもは本来、菓子屋でございますので、菓子屋らしさを出していこうという意識はあるんですがそういう展開はまだできてない。9月15日で神戸凰月堂88がオープンしてちょう

ど丸10年なんです。このブライダルニーズの多様化する中で、全てを収吸できるというんでしょうか、やはり施設それぞれ個性がありますし、それで原点にかえろうといった意味もこめて、新規契約専門のブライダルフェスタ'95を行います。婚約後のアフターケアもふくめて新しい方向性をさがしていこうかなと思っています。

見市　われわれは北野という比較的地震被害の少なかった地域に立地してましたので、最近やっと戻りつつあるという現状です。神戸のブライダル市場を震災後活性化させるには、何かうちだしていく必要があると思いますね。何かしかけが神戸らしいテーマでできたら人々を呼べるんじゃないかという気がするんですが。

井上　最近のブライダルの趣向というのはかなりチャペル志向というのがあるんですが、その中にも本物志向がありまして、そういったひとが私どもの方で式をあげていただいてます。それと最近は挙式される側に、その場に居合わせた人たちに自分たちを見てほしいという風潮がありますね。昔は恥ずかしいという風だったんですが。

司会　三宮写真室さんはお若い世代の代表ということで…。

衣川　最近、結婚された方をみてますと、若い人の間ではホームウェディング的なものが増えてると思います。若い人にはちょっとホテルは格式ばりすぎてて、というんでしょうか。あとレストランウェディング。本当は自宅でしたいんだけれど、それだけのスペースがない。で、アト・ホームな場所ということで選ばれているようです。たいていそういったことを決めるのが男性ではなくて女性のようです。女性がこんなな素敵な所をみつけたから皆さん来て下さいという気持ちでやってらっしゃるようです。まあ肩のこらない披露宴というのが多くなってきているんじゃないでしょうか。

司会　真珠でいうと神戸はパールシティ神戸ということで世界的にうりだしてるんですが…。

丸本　ブライダルのマーケットというのはつみかさねがきかないんですね。一回一回が勝負になりますね。婚約指輪の主流は今ダイヤで真珠の割合は10%ですが、ほとんどの花嫁が真珠のネックレスをつけてらっしゃるのでブライダルでも今後、いろいろな展開を考えていきたいと思っています。今までわたしどものお店には男の方というのはほとんどいらっしゃらなかったんですが、ここ数年男性のお客さまがふえました。やはり愛のプレゼントとして買われていかれているようです。真珠というのはそんなに価格が高くないので、ある一定のボリュームがある割には割安ですので大学生の方でもちょっとがんばって、アルバイトすれば買えるということから、お若い女性で真珠をつけておられる方がふえたという状況が生まれたのかもしれませんね。

司会　男性が優しい時代になったのですね。先程ホームウェディングというお話がでましたが、この頃は婚約式なんていうのもはやっているそうですね。

☆「愛の街・神戸」でキャンペーンを…

村上　婚約というか結納というのは今まで自宅で行ってましたよね。でも昨今の住宅事情というのもマンションで狭いとか畳の間がないといったことからホテルでされる方も多いんではないでしょうか。あとのお食事のことなど考えるとホテルの利用率というのはかなり高いんじゃないでしょうか。結婚式というのは、思いますに、自宅以外でというのは明治33年の東京大神宮の考え出した神前結婚式がしかけになったんではないでしょうか。それから今日までずっとセレモニー産業だったんではないかと思うんです。結婚する若い世代とご両親の価値観やイメージが一致しないまま式をむかえるということも多いんじゃないでしょうか。あと結婚する人たちに対しての心構えというか、ふわふわした気持ちだけでなくて本当の結婚生活に必要なことを教えるといった花婿花嫁学校というものもあるべきだと思います。他の産業にくら

べるとブライダルというのは「待ち」のビジネスだと思うんですね。セレモニーだけでなくてもっとトータルで巣立っていく彼らを送り出す産業になったら素敵ですね。震災後、特に思うのは、きざかもしれませんが神戸の人たちというのは愛という言葉を世界に発信できるんだということです。愛のある暮らし、愛のある暮らしのできる街。先程のロビーウェディングみたいに自分たちとは関係のない人たちがカップルを祝福する街。神戸にいけばみんなが祝福してくれるというイメージが、つくっていけたらいいですね。

司会　ロビーウェディングというのはまさにそうですね。

井上　私どもの方でも、本殿で挙式された方に、参拝客が拍手すると大変喜ばれたりします。

衣川　神戸を愛の街にということでしたら、たとえば神戸のどこそこで夕日をみたら結婚できるという風にもっていくというのはどうでしょうか。今女性がすごく素敵だと思うんですが、なかなか出会う場所がない、そこで神戸で出会いの場所をつくってあげる。お膳立てから結婚式までみちびいてあげるというわけです。

見市　神戸といえば真珠。あとお菓子やそういう神戸らしいものをプレゼントやサービスとして提供していくというのもありますね。

丸本　神戸のオリジナルのデザインのテイアラをつくって、それを象徴的にどこかに飾りそのミニチュアを各会場で花嫁に使って頂くとか。

浜田　神戸の地域性というかオリジナリテイをどうやってだしていくのかというのは非常に難しい問題ですね。例えば、神戸は魚もうまい、肉もうまい。食に関しては非常に研究の余地がありますよね。本当のオリジナルというのをどういう風に発信していくか…。音楽で共通のものをつくったりというのは素晴らしいでしょう。神戸ブランドのパック商品というのを確立していければいいですよね。

村上　これからの結婚式はもっともっと多様化していくと思うんです。もっとお金をかけることもあれば簡素化することもある。お客さまのニーズにあわせていける形をもたなくてはいけないですよね。例えば結婚というと若い人たちのものというイメージがありますが、熟年結婚だってふえてる。そういうカップルがホテルに来られたとき、相談しにくいという雰囲気がまだあると思うんです。そういったことも考えていくべきですよね。

見市　熟年カップルになられると、そういうのはあるかもしれませんよね。

村上　私、何度か熟年カップルの結婚式に出たことがあるんですけれども、素晴らしいんですね。人生の友、というのが壮々たるメンバーで、しっかりお金もかけていらっしゃる。でもご当人たちは恥ずかしい恥ずかしいっておっしゃって、周りが強引に式をあげさせているという風景をけっこう見るんですね。だから、経済力もおありですし、熟年カップルこそ豪華にされたらいいのにな、と思って見ているんですが。

見市　ええ。ホテルのブライダル受付なんかも、かなりそういった熟年のお客様より若いスタッフがおりますので来づらい雰囲気があるのかな、という気はしますね。

司会　百貨店のブライダルサロンなんかは比較的、年配の方が座っておられますよね。ブライダルマザーといって、お母さんの様な存在でいらっしゃるのが話しやすいのではないでしょうか。まぁ、方法論というのも多様化しているということですね。

村上　こうして新郎新婦というのを想定していましても第一回目の結婚を考えるのが初々しいし商品価値も高い様に思えるのですが、今は離婚率も高いんで、第二第三の人生を歩む方々もいらっしゃるわけで。そういう方々が、てれずにできるブライダルメニューというのも考えてあげたらいかがでしょうか。大体そういった方は、二回目三回目だから…と、衣裳にしても披露宴にしても遠慮されるんですけれど…。

井上　私が近頃感じるのは、婚礼の多様化にともなって、安易に二人だけで、とにかく安く上げてすませよう、というのが離婚率の高くなる原因じゃないかと。ある程度痛みを感じるというか、お金と手間をかけていれば、そう簡単に別れることはないんではないでしょうか。確かに、1バツ2バツという、結婚の軽薄化という風潮はありますが、せっかく縁があって一緒になるのだし、安易に結婚したり、別れたりするのを歓迎すべきではないと思いますね。

村上　1バツ2バツのカップルも、今度こそという気持ちがありますから、そういった人達を優しさをもって、業界が受け入れ態勢をつくって下されば思うんですけれど(笑)。

井上　近頃安易に簡単に婚礼をあげてしまうから離婚してしまうんじゃないかとわたしは考えます。ある程度お金と手間をかけてるからこそ、別れないんではないかと…。

見市　結婚や結婚式というものがあまりにも多様化してしまうとブライダル産業というのはどうなってしまうんだろうという危惧はあります。

井上　やはり若い人のニーズに応えるだけというんでなく、一生に一度のことですから儀式をきちんとするのも大切だと思いますね。私がまだ、この仕事に関して素人で、会館をやることになった時に、私は素人なりにこういう提案をしたんですが。とにかくお客様から大切なお金を頂く。それで仮に予算が結果的にオーバーしてしまっても、いいお式で喜ばれたのであれば、そのお金は安いんだ、と。むしろ予算より安く上がっても、いいお式にならなければ、そのお金は高くついた、ということなんだと。やはり喜んでもらう、よかったなと思っていただくことを考えようと。

司会　ブライダルも多様化していく中でこの神戸も震災をこえて何かやっていけたらと。知恵のだしどころではないかと思うんですが…。

大坪　わたしは思うんですが神戸の観光というのは総合力だと。神戸というのは異人館があって港があって六甲山があってハーバーランドがあってという総合力でもってきているわけです。ブライダルもその中の一つという位置づけにしていくべきじゃないでしょうか。

渡辺　総合的に見ても、やはり道路を一日も早く整備することでしょうね。交通の便というのは大切だと思いますよ。ビジネスも観光も含めて神戸へ気軽に足を運んでいただけるようになってはじめてブライダルマーケットニーズに応えていけるんではないでしょうか。

司会　そうですね。ショッピングにしても飲食にしてもトータルでイメージができあがってますからね。全体が協力して復興の道をたどっていかなくては。

見市　例えばブライダル業界が共同で広告をだして結婚する人たちへメッセージを発信していくというのはどうでしょう。神戸の業界がある程度受け皿をもってブライダルのお世話をするという…。

村上　それは素晴らしいアイデアですね。いろいろな事情がおありで、身内だけですませてしまったり、今回の震災で結婚式ができなかった人とか簡単にすませてしまった人というのはいらっしゃるでしょう。そういう人たちに対して皆で祝福するというのはいかがでしょう。チャペルを中心にするか、ロビーを中心にするか、人が集まる所を中心にするという形式で。

司会　私はやはりその日は17日というのがキーワードだと思います。震災から11カ月目のクリスマス時期の12月17日なんてどうでしょう。

村上　神戸のブライダル業界のやさしさとしてカップルの人生の門出を祝うというね。

司会　12月17日を愛の日としましょうか。「神戸は愛」ということでがんばりましょう。

田崎真珠株式会社
取締役社長　田　崎　俊　作
神戸市中央区港島中町６－３－２
ＴＥＬ（078）302－3321

オールスタイル株式会社
取締役会長　川　上　　勉
神戸市中央区港島中町６－５－１
ＴＥＬ（078）303－3311

キャンペーン「ファッション都市神戸を考える」の企画は以上各社の提供によるものです。

■まちづくり座談会・トアロードシリーズ〈Ⅱ〉

文化の街・トアロードに まちづくり協議会の発足を

《出席者》（五〇音順・敬称略）

嶋田　勝次〈神戸大学名誉教授〉

清水　俊夫〈株式会社クロス取締役社長／トアロード中央商店街振興組合・神戸トアロード・センター協同組合理事長〉

髙田　昇〈立命館大学教授・都市計画家・共同再建支援チーム代表〉

中西　省伍〈株式会社サロン・デ・モード中西代表取締役社長／トアロード山手会会長〉

光井　章〈株式会社カサベラ光和取締役社長・株式会社カサベラホテルシステム代表取締役〉

《司会》

小泉　康夫・小泉美喜子

〈月刊神戸っ子社長〉〈月刊神戸っ子編集長〉

前回の座談会で、被災都市の再開発事業に取り組んでおられる光井章氏より提案されたトアロードまちづくり協議会（仮称）の設立。今回は都市計画・建築家の髙田昇氏にもご参加いただき、協議会発足へ向けての第二弾座談会を開催した。復興へ向けての足並みはさらに力強いものとなった。

★新しい街のひとつの作品に

髙田　震災から復興へ向けていろんな街がスタートしていますが、ひとつの街がまとまってやっていこうという動きのあるところと、バラバラで成り行き任せというところがはっきりと別れています。今が復興の転換点とも言えますね。まず自分たちで立ち上がって街を一本化し、自分たちなりのビジョンを持ってその上で行政に協力を求めていく、そういう動きをしているところはいい方向に進んでいくと思います。

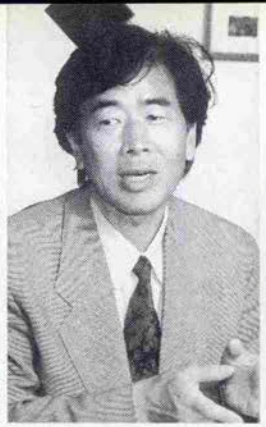
特にトアロードは、私の学生時代には神戸では誰もが知っている街だったのが、その後の長い時代の中で影が薄くなってきたという印象があります。しかし、まさに山と海をつなぐ唯一の道であるトアロードが立ち直っていく姿は神戸全体の希望の灯となるのではないかと私は思うんです。この機会に、新しい街としてひとつの作品を作るという考え方で取り組んでいただきたいと期待しています。

嶋田　確かに影がないね。影を作るためには光が必要です。具体的には南から北まで三つの商店街※のポイントを作ることですね。そのためには住み込むということがぜひ必要となってきますね。

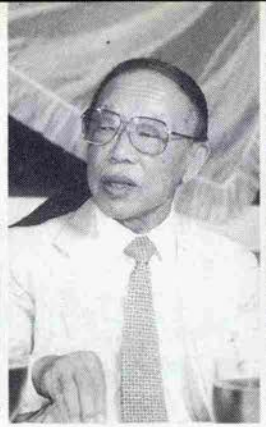
※大丸神戸店前～JR高架までのトアロード東亜会、高架～生田新道までのトアロード中央商店街、生田新道～北のトアロード山手会

中西　新興のセンター街なんかが切磋琢磨している中、我々はトアロードというブランドに少し甘え

光井　章さん


高田　昇さん

中西　省伍さん


清水　俊夫さん

嶋田　勝次さん

過ぎていたのではないかというきらいがあるように私は思います。

高田　この震災は逆に、そういったこれまでの経過をあまり気にせず、街の若返りのチャンスにできるのではないかと思います。

★キーワードは住まいと文化

光井　従来から計画されているホテルトアロードを含む一画約四千坪の再開発の話も、今回は具体的な計画であるということでうまくいくのではないかという気がしています。それに加えたこのたびの街づくりを通してのトアロード全体の復興計画、この二つが大きな柱となっていくのではないかと思うのですが、住民の意見がまとまらなければなかなか行政側も協力できないのが実情ですね。

高田　まず地元の方々に、どういう手法でやっていくのかという共通の認識を持っていただかなければいけない。ひとつには街づくりのコンセプトを一本化すること。この街はこういう街なんだとひとつの言葉できっちりと表し、まずそれを元にしたトータルデザインをする。それに沿ってひとつひとつの建物を復興させていく。

　また、住むということもこれから街にとって非常に大事になってきますね。トアロードに住むというのはすごくお洒落なことだと思うんです。日本ではいつの間にか、都市は住むところではないというように思い込んでしまっているけれど、ニューヨークの摩天楼やパリのシャンゼリゼなどではたとえ小さな部屋でも街の中に住んでいるということをとても誇りにしている。そういう生活の仕方をこれからの若い人たちは志向すると思います。郊外の団地に住むこととどう違うのかといえば、それは単なる生活だけではない多様な文化的な楽しみであるということです。トアロードに住むということは神戸の街づくりの新しいキャッチフレーズになるくらいの大きなテーマになるのではないでしょうか。

　もうひとつには、それを実現化する手段として、街全体が共同で事業をすすめていくということを基本に置こうということについて、ぜひ皆さんに共通の認識を持っていただきたいということです。

小泉康　テレビで放映された日経連のソニーの会長の話では、これからの日本の経済にとって一番大事な課題は、せめて日本の住宅をアメリカ並みにとまではいかなくてもヨーロッパ並みにしていくという目標を立てるということでした。これはまことに当を得たキーワードだと思うんです。トアロー

ドにシャンゼリゼ、あるいはパリの街角に似た住宅を持ってくるというのは、神戸だけではなく日本のひとつのモデルケースになるのではないかという気がしました。

嶋田　非常にいい話ですね。

高田　どこへ行っても胸を張って言えますよね。〝神戸のトアロードに住んでいるんですよ〟と。

　これからの経済を支えていくのは住まいと文化だと思うんですね。これまでのように製造業におんぶした形の経済も限界にきている。震災後は住宅が確実に必要となっていますし、しかも住宅を作ることに対して様々な優遇策ができています。作れば必ず住む人がいるということもはっきりしていますしね。早くやれば必ず需要はついてきます。とてもやりがいのある時期だと思いますね。

光井　全く同感です。トアロードの再開発の基本コンセプトは、ビルの上にアパートをたくさんつくり、街の中に住みついてもらうということなんです。

嶋田　従来の再開発では、人やテナントを呼んできて、そしてビルを作って採算が合っていたのですが、それは逆だと思うんです。まずビルを作ってそこに住んで、そして商売をする、これが一番完結的だと思います。

★文化的刺激を生む街へ

中西　もう二十五年前の話になりますが、今の土地を手に入れるために持ち主だった読売新聞東京本社の販売部のボスに「俺はどうしてもあそこでファッションをやりたいんや、男の夢やからなんとかかなえてくれ」と何度も頼みに行って、やっとくどき落としたんです。うれしかったですね。そういう想いをひとりひとりに持っていただくと、それがジョイントされたときものすごく大きなパワーになると思うんです。

光井　具体的に将来の見通しと展望があって、しかも事業に関するきちんとしたスタンスができていれば、地元の人たちも参加しやすいと思います。

高田　文化というとホールとか図書館とか美術館といったものだけをイメージしがちですが、中西さんのお店や神戸っ子の編集室がトアロードにあるということもひとつの文化なんですね。

　要するに、情報発信能力のある人たち、クリエイティブな生き方をしている人たちが集まるところが文化の街だと思うんです。いろんな創造活動にかかわっている人たちがトアロードに集まってきて、お互いが切磋琢磨して文化的刺激を受ける、そういう街に住むことによって自分自身を高めていけるということが、街の中に住む素晴らしさだと思うんです。残念ながら日本にはまだそういう街がない。そうなる可能性をもった街が、震災後のトアロードではないかと思います。

光井　トアロードにアパートができて、そこに住んだらそれはお洒落な生活ができると思いますね。

清水　ところで、トアロードには郵便局がひとつもないんですね。なにわ銀行が来年の二月で閉鎖するので、そこへ作ってもらえればなと思っているんですが。

嶋田　それはいい話ですね。

中西　そういうことこそ再開発の中でやっていくべきだと思います。小さくてもいいから外国為替の扱える郵便局が欲しいですね。

嶋田　実にトアロードらしいなあ。

光井　絵になりますね。これからのトアロードの再開発にあたって、ぜひ取り入れていきましょう。

中西　それから人を引きつけるモニュメントのようなものを行政の力を借りて作ればなと思っているんです。おかしなもので、ひとつ何か目玉ができると枝葉は自然に発生してくる。その最初の目玉を作るのが大変なんですね。

小泉美　北野町の場合はキングスコートを作ったのがスタートで、

その後ローズガーデンができ、北野異人館倶楽部ができ、あれよあれよという間に発展していったわけです。ただ北野町にはもともと外国人の作ってきた異人館など文化遺産があったんです。やはりここでも〝住まい〟がキーワードだったわけですよね。

★積極的に街のPRを

中西　北野には年間百八十万人くらい観光客がくるそうですが、統計をとってみると、南へ降りていくのにその約二割くらいしかトアロードを通っていないんです。その人数をトアロードを通してウォーターフロントまで引っ張っていくようにすれば、神戸市としてももっと活気づくのではないかと思うんですが。

大きな被害を受けたトアロードにも解体跡地が目立つようになってきた

高田　そうですね。しかしハードな施設のアイデアを出しているだけでは時間的に間に合わない。二、三年もしたらみんなバラバラとそれぞれ復旧してしまいます。ですからまず、今すぐできることは何かということを考えなくてはいけないと思うんです。そのためには何かソフトの面から取り組むことですね。トアロードにはめぼしいものがないとおっしゃいますが、外から見ると素敵ないいお店がたくさんありますよ。

小泉美　大人のものがね。

高田　そう。ただそれがアピールできてないんですよね。もっとトアロードというものを前面に打ち出すある種のCI戦略、あるいはイベントぐらいはやってもいいと思うんです。トアロードが海から山まで一本でつながっているんだということさえも今の若い人達は知らない。だから北野でわっと遊んだ後、そのままどこか次の街に行ってしまうんです。トアロードは一本でつながっているんだということ、そしてその中にいろいろ楽しいところがあるんだということを知ってもらうためのイメージアップ戦略をやっていかなければいけないと思います。そのためにも組織の一本化、そして街づくりのシステムを確立することを今すぐにやるべきですね。おそらく地元の方々はそういった声が掛けられるのを待っておられるのではないかと思うんです。

清水　実は解体が済んで空き地になっているところにテントを張ってイベントをやろうと計画しているんです。こうしてトアロードも生きているんだということをアピールしようとね。

高田　それはいいですね。とにかく一度みんなが集まることが大事だと思います。三つの商店街と通りに沿った企業に呼び掛けて、トアロードの復興フォーラムみたいなものを開催するとか。そしてその場で、トアロード全体の街づくりに対する組織を作ろうじゃないかという提案をされれば皆さん賛同されると思います。

――ここでトアロード復興祭を十月十四日～十六日の予定で行おうと話し合われ、十五日にはシンポジウム懇親会（午後五時～九時）の開催が山口銀行神戸支店から会場提供の協力を得て決定した。

小泉美　なんだかうれしいですね。震災でパワーをいただいたというか、震災を機に手をつなぎあえたという気がします。面白くなってきそうですね（一同笑）。

〈八月二十九日、ホテルトアロードで〉